

## O12-066

### 発達が気になる幼児における発達検査の視覚模倣課題と聴覚模倣課題の比較

中井 靖

京都女子大学心理共生学部

【目的】 模倣は新生児模倣の生得的・視覚的なものから始まり、学習経験を通して音声言語につながる聴覚的なものやその他の感覚的なもの、対人社会性につながる認知的・動作的・情緒的なものへ発達する。このように模倣発達は行為そのものの段階から他者の意図理解や状況理解といった概念理解の段階へと進む。自閉スペクトラム症をはじめとする発達が気になるこどもにおいては模倣発達の特異性が指摘されている。すなわち、発達が気になるこどもにおける模倣発達を詳細に検討することは「発達が気になる」の実態を明らかにすることが考えられる。さらに、この明らかになった実態に基づき、支援方法や支援ツールの開発につながることを期待される。そこで、本研究では、発達が気になる幼児における発達検査の視覚模倣課題と聴覚模倣課題それぞれの成績を比較し、その要因を検討した。【方法】 児童発達支援を利用する幼児に対して新版K式発達検査2020を実施した。視覚模倣課題である認知・適応領域のトラックの模倣(年齢区分: 2歳6か月～2歳9か月)と聴覚模倣課題である2数復唱(年齢区分: 2歳6か月～2歳9か月)を実施した幼児について、両検査項目の通過-不通過の割合に違いがあるのかを検討した。なお、本研究は京都女子大学臨床研究倫理審査委員会の審査を経て、承認を受けている(2021-10)。【結果と考察】 トラックの模倣と2数復唱それぞれの通過-不通過の割合を比較するため、 $\chi^2$ 乗検定を行った。その結果、両者に有意な差があることが認められ、視覚模倣は聴覚模倣より通過割合が大きいことが示された。その要因については当該幼児における自閉スペクトラム症の診断の有無、保護者が感じている日常生活場面における当該幼児の気になる行動の内容と関連することが考えられた。

## O12-067

### 幼児期に感覚特性を示した要支援児の就学後の視知覚における調査研究

伊東 祐恵<sup>1)</sup>、近藤万里子<sup>2)</sup>、小林 千鶴<sup>3)</sup>、佐々木沙和子<sup>4)</sup>、星山 麻木<sup>5)</sup>

<sup>1)</sup>横浜市西部地域療育センター、

<sup>2)</sup>帝京短期大学 こども教育学科、<sup>3)</sup>柚木武蔵野幼稚園、

<sup>4)</sup>帝京大学 教育学部、<sup>5)</sup>明星大学 教育学部

【目的】 われわれは、幼稚園の年中児を対象に保護者が行った日本版感覚プロフィール(以下、SP)の感覚評価より、4象限(低登録・感覚探求・感覚過敏・感覚回避)のいずれかに感覚の問題をもつ児が一定数いることを明らかとし、年長と比較して感覚過敏を有しやすいことを報告した(伊東ら、2023)。また、若宮(2017)によると視機能や視知覚・視覚認知、目と手の協応など視覚情報処理は、書字や数量の把握に関係しており機能不全が起こると学習障害となる可能性がある。本研究は、幼児期に感覚の問題をもつ児が就学後にどのような視覚認知機能を有し、就学後の学習に影響するかを明らかにした。【方法】 2022年度のA幼稚園とB幼稚園の年中児90名の内、SP評価より4象限のいずれかに感覚の問題を示した児54名の内、11名から研究協力が得られた。方法は、小学校1年生から視知覚関連基礎スキルの評価を行えるWAVESを用いた。分析は、WAVESの4つの指数である、1.視知覚指数(以下、VPI)、2.目と手の協応全般指数(以下、ECGI)、3.目と手の協応正確性指数(以下、ECAI)、4.視知覚+目と手の協応指数(以下、VPECI)において、指数(経過を見る86以上・経過を見て必要に応じて支援する76～85・早急に支援する75以下)を算出し、各指数の平均と指数75以下の人数を求めた。本研究は、明星大学倫理審査委員会に承認を得ている(承認番号2022-012)。【結果】 検査を実施できた児は8名であった。平均VPI指数は70.6、平均ECGIは85、平均ECAIは77.6、平均VPECIは67.6であった。また、指数75以下を示した児の内、指数4つ全てに示した児は1名、指数3つに示した児は4名、指数2つに示した児は1名、指数1つに示した児は1名であった。どの指数も86以上を示した児は1名であった。学習状況は、「漢字のなぞりがうまくいらない」「漢字を写すことが苦手」「繰り上がりの数字を足す・引くがごっちゃになる」などがあげられた。【考察】 幼児期に感覚の問題を示した児の中には、視覚認知機能の問題を抱える児がいることがわかった。特に、漢字のなぞりや写し・計算などは、1年生から学習の配慮や工夫など支援が必要な児がいた。また、幼児期の感覚評価は就学後の学習状況を予測する一つの視点となる可能性も示唆される。